

〈原著論文〉

学校コミュニティでスクールカウンセラー等の心理職を活用するためのシステム開発
— A 中学校においての実践的研究 —

山口豊一
(跡見学園女子大学)

新彩子
(跡見学園女子大学大学院)

奥田奈津子
(跡見学園女子大学大学院)

A Study on the System of the Use of School Psychologists in School Communities :
the Practical Study in Junior High School

Toyokazu, Yamaguchi
Atomi University

Ayako, Nii
Graduate School of
Atomi University

Natsuko, Okuda
Graduate School of
Atomi University

概要

管理職及びミドルリーダーに介入をし、学校マネジメント委員会のチーム援助体制、チーム援助行動、心理職活用との関係について検討することを目的とした。マネジメント委員会機能尺度では、「情報共有・問題解決」と「教育活動の評価と見直し」、チーム援助体制尺度では「保健室相談室の活用体制」、チーム援助行動尺度では「援助チームへの積極的関与」と「援助チームでの役割遂行」、心理職活用尺度では、「心理職への評価」と「心理職の有用性」の各下位尺度において、介入後の方が、得点が高くなった。介入したことで生徒の情報や、具体的な支援策も共有できたためであると考えられる。また、生徒指導部委員会に参加した教員3名の介入前と介入後の下位尺度得点を比較した結果、「情報共有・問題解決」はいずれも得点が上がった。このことから、介入をすることで生徒の情報を共有でき、問題解決をするために話し合いを行うと効果的であることが示唆された。

abstract

The purpose of this paper is to examine the relation between the team support system of the school management committee, team support behavior and the use of psychologists, by intervening in school executives and middle leaders. After the intervention, higher scores were recorded for "information-sharing / problem-solving" and "the evaluation and improvement of the use of education" on the scale for the management committee function, for "the system of use of the school infirmary / counseling room" on the scale for the team support system, for "active participation in the support team" and "fulfillment of the role in the support team" on the scale for the team support behavior, and for "the evaluation of psychologists" and "the effectiveness of psychologists" on the scale for the use of psychologists. This is presumably because the intervention allowed them to share student information as well as concrete support

measures. After the intervention, three teachers who participated in the student's guidance committee also got a higher score for "information-sharing / problem-solving". These results suggest that interventions allow for an effective sharing of student information and that discussions bring positive feedback.

キーワード：学校コミュニティ，スクールカウンセラー，心理職，介入実践的研究

KEY WORDS：school community, school counselor, psychologists, intervention practical research

I. 問題・目的

不登校，いじめ，発達障害（ADHD，自閉症スペクトラム障害等）などにより，学校において困難を抱えている児童生徒は多く存在している．昨今，児童生徒の問題が多様化する中で，山本（2011）は，従来の学校の支援システムでは対応しきれないケースが増えてきたと指摘している．学校の中の組織や人だけでは，児童生徒の多様な援助ニーズに応えることに限界があるのである．

そこで現在，学校コミュニティ（学校を中心とする市町村教育委員会単位の地域・社会）の中で，多様な援助ニーズを持つ児童生徒に対する支援者として，スクールカウンセラー（以下，SCとする）や，他の心理職（心の教育相談員，ボランティア相談員や学生相談員等）の活躍が期待されている．実際，山口・伊藤・下平（2012）によると，学校の運営において，学校にある問題やニーズに対して，学校の中の組織や人だけでなく，外部の専門機関や心理職との連携を図ることで問題解決がスムーズに行われているとされている．また，公立教育相談室のカウンセラーが学校に関与したところ，教職員間に受容的な雰囲気醸成され，教育相談的な関わりが増加し，援助対象となる生徒や保護者の，心理的安定が図られたことも実証されている（山本，2011）．

心理職の活躍が期待される一方で，その活用システム（ここでいう活用システムとは，心理職を活用するルール・体制・組織を含む）に至っては，厳密には定められていない．多くの場合，心理職は非常勤であり，その活用システムや位置づけは，学校ごとに任せられているのが現状である．そのため，学校運営の要である管理職，または心理職が異動すると，それまでの心理職の活用システムを再構築する必要が出てくる．山口・水野・本田（2012）は，学校コミュニティで心理職を有効に活用するためには，教職員と心理職の双方でどれだけ折り合いをつけられるかが今後の課題であると述べている．

学校コミュニティの中で，教職員と心理職が協働することで，心理職の力を有効に機能させるためにも，心理職の活用システムの開発は，危急の問題である．

学校コミュニティにおけるシステムの開発には，「マネジメント委員会」を中心とする学校組織への介入が効果的である（Chrispeels, Castillo & Brown, 2000；Poter, 2008；Richard & Martin, 1979；Scott, 2000；山口・石隈, 2009, 2010）．「マネジメント委員会」とは，学校心理学における心理教育的援助サービスの一つのレベルを指す．企画・運営委員会などがこれに当たり，カリキュラムや援助サービスのマネジメントを行う（山口・家近・樽木・石隈, 2010）．企画・運営委員会

の主たる担い手は、管理職やミドルリーダーである。また、学校コミュニティにおける最高機関は、市町村教育委員会（以下、教育委員会）である。これらの役職や機関の意向は、心理職の活用システムに多大な影響を与えている。よって、その開発には、管理職やミドルリーダー、教育委員会の心理職に対するニーズ調査が必要となってくる。しかし、これまでの研究では、児童生徒、保護者、教員への心理職に対するニーズ調査は行われているものの（例えば、石隈・小野瀬，1997；山口・水野・石隈，2004 など）、管理職、ミドルリーダー、教育委員会への調査はみられない。

つまり、多くの心理職は、学校現場の中で、自身を派遣している教育委員会や、「マネジメント委員会」の方針を明確に捉えることが出来ずにいる。そのため、例えばSCであれば、非常勤でなおかつ他に所属をもたないケースも多く、仕事上で迷ったときや困ったときに、相談できる人がなかなかいない現状から、問題を一人で抱えてしまうことが多いとされている（大橋・今野，2011）。

以上から、システム構築にあたっては、非常勤の心理職が一人で開拓することは現実的に難しい状況にあり、学校を中心とするコミュニティの中で考えていくべき課題であるといえる。しかし、学校コミュニティにおける心理職の活用システムに関する包括的・実証的研究は少なく、未だにそれぞれの学校の管理職・ミドルリーダー等の采配、または心理職自身の力量に委ねられている。

そこで、学校コミュニティにおける心理職の効果的活用を目的とし、心理職の活用システムの開発のための知見を得ることとした。本研究では、生徒指導部委員会の出席者及び調査協力者の各教員、学校組織の責任者である管理職及びミドルリーダーを調査対象者として、学校コミュニティのマネジメント委員会機能、チーム援助体制、チーム援助行動及び心理職活用についての介入効果を検討する。

II. 研究1

1 方法

a 調査協力者

A 中学校に在籍する教職員計 21 名（男性 10 名，女性 11 名）。

b 調査期間

2013 年 7 月～2014 年 2 月。

c 調査手続き

調査協力者に対して調査目的及び概要が説明され、同意を得た後に実施された。

1 回目（2013 年 7 月）の質問紙調査（プレテスト）の後、調査協力校の生徒指導部委員会に第一著者の心理職が 10 回参加し、心理的な介入（主にコンサルテーション）を行った。その後、心理的な介入が学校全体の教員に、間接的にどのような影響を与えるかを明確にするため、2 回目（2014 年 2 月）の質問紙調査（ポストテスト）を行った。

① 心理職による介入

生徒指導部委員会の出席者は、表 1 の通りである。

（表 1）

② 介入の概要

生徒指導部委員会は各回 50 分間、全 25 回行われた。そのうち、心理職（第一著者）の参加した回数は 10 回であった。心理職は、主に生徒の個別対応についてコンサルテーションを行う等の介入を行った。介入の概要は表 2 のとおりである。また、介入例は表 3 の通りである。

(表 2)

(表 3)

d 質問項目

① フェイスシート

性別、年齢、所属・勤務地、役職、教員経験年数についてそれぞれ尋ねた。

② チーム援助体制尺度

チーム援助体制尺度は、チーム援助の規則や手続き、組織の状態を測定するものである(山口・樽木・家近・石隈, 2011)。この尺度は、「学年会・委員会の活用体制」「保健室相談室の活用体制」「学年会・委員会の会議の運営」「SC等の活用体制」の 4 因子 30 項目であり、「全く当てはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」「とてもあてはまる」の 4 件法を用いて回答を求めた。

③ チーム援助行動尺度

チーム援助行動尺度は、チームで援助する行動を測定するものである(山口・樽木・家近・石隈, 2011)。この尺度は、「援助チームへの積極的関与」「援助チームの役割遂行」の 2 因子 16 項目であり、「全く当てはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」「とてもあてはまる」の 4 件法を用いて回答を求めた。

④ マネジメント委員会機能尺度

マネジメント委員会機能尺度は、それぞれの学校のマネジメント委員会の機能を測定するものである(山口・石隈, 2009)。この尺度は、「情報共有・問題解決」「教育活動の評価と見直し」「校長の意思の共有」の 3 因子 29 項目であり、「全く当てはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」「とてもあてはまる」の 4 件法を用いて回答を求めた。

⑤ 心理職活用尺度

心理職活用尺度は、学校コミュニティにおける心理職の活用のシステムを測定するものである(山口・井上, 2013)。この尺度は、「心理職への評価」「心理職の有用性」「心理職の活用体制」の 3 因子 18 項目であり、「全く当てはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」「とてもあてはまる」の 4 件法を用いて回答を求めた。

2 結果・考察

生徒指導部委員会に参加した 21 名の回答全てが有効であったため、21 名すべての回答を分析対象とした。

介入前と介入後の各下位尺度得点を t 検定で比較し、表 4 に示した。

(表 4)

チーム援助体制尺度では、「保健室相談室の活用体制」が 1% 水準で有意であった

($t(20) = -2.83, p < .01$).

チーム援助行動尺度では、「援助チームへの積極的関与」と「援助チームでの役割遂行」において1%水準で有意であった ($t(20) = -2.87, p < .01, t(20) = -4.10, p < .01$).

マネジメント委員会機能尺度においては、「情報共有・問題解決」と「教育活動の評価と見直し」において1%水準で有意であった ($t(20) = -3.28, p < .01, t(20) = -3.73, p < .01$).

心理職活用尺度においては、「心理職への評価」と「心理職の有用性」、「心理職の活用体制」において1～5%水準で有意であった ($t(20) = -3.87, p < .01, t(20) = -2.14, p < .05, t(20) = 3.42, p < .01$).

チーム援助体制尺度では「保健室相談室の活用体制」、チーム援助行動尺度の「援助チームへの積極的関与」と「援助チームでの役割遂行」、マネジメント機能委員会尺度の「情報共有・問題解決」と「教育活動の評価と見直し」、心理職活用尺度の「心理職への評価」と「心理職の有用性」において、介入前よりも介入後のほうが、得点が有意に高くなった。これは、介入により、生徒指導部委員会への参加者以外において、間接的ではあるが、各学年会や職員会議などを通して児童生徒の情報や、具体的な支援策も共有できたためであると考えられる。また、介入したことにより、心理職への評価と有用性が上がっていることから、生徒指導部委員会の意義があるといえるだろう。また、心理職活用尺度の「心理職の活用体制」は、介入前よりも介入後の方が、得点が有意に低くなった。これについては、今回は生徒への対応策の会議であったために、心理職活用体制が整備されるまでには至らなかったためと考えられる。

Ⅲ 研究2

1 方法

a 調査協力者

A 中学校に在籍する教職員計3名(男性1名(F), 女性2名(G,H)).

b 調査期間

2013年7月～2014年2月.

c 調査手続き

研究1と同様.

2 結果・考察

生徒指導部委員会に参加した教員3名の介入前と介入後の変化について検討を行い、表5に示した。

(表5)

「情報共有・問題解決」においては、いずれも得点が有意に高くなった。これにより、介入をしたことで生徒の情報を共有でき、問題解決をするために話し合いを行うことに効果があることが示唆された。

「教育活動の評価と見直し」においては、FとHにおいて得点が有意に高くなったが、Gの得点

に有意な差は見られなかった。これにより、介入において教員が心理職（第一著者）のアセスメント及びコメントを受け、評価と見直しを行うことによって、効果が生じる場合があることが示唆された。

「校長の意思の共有」においては、いずれも得点に有意な差は見られなかった。これは、介入前から介入後の短期間では、管理職が自ら最終判断をしたり、子ども援助に関する考えを他の教員に表明したりするまでには至らなかったことが考えられる。

また、「情報共有・問題解決」においては、3名全員の得点が有意に高くなり、加えて得点自体が他の下位尺度得点と比べて高くなっている。つまり、「情報共有・問題解決」が特に効果があったことが考えられる。

IV 総合考察

1 研究のまとめ

心理職（第一著者）がA中学校の生徒指導部委員会に参加し、コンサルテーションを中心とする介入を行った（10回）ことで、マネジメント委員会機能、チーム援助体制、チーム援助行動、教員全体の心理職活用が促進される結果となった。これは、心理職による生徒指導部委員会へのコンサルテーションが、各学年会（1～3年）や職員会議などで伝えられ、共有されたことで、心理職の間接的コンサルテーションの効果があったことによると考えられる。つまり、生徒指導部委員会という学校における援助サービスのマネジメント委員会に、専門家が長期間介入することで、教員のチーム援助体制、チーム援助行動、心理職活用に対する認知が変わることを示唆している。心理職の活用システムの一つの方法として、本研究の方法が有用であることが明らかになったと考えられる。

また、生徒指導部委員会のメンバー（3名）への直接的影響を検討した結果、マネジメント機能尺度（「情報共有・問題解決」、「教育活動の評価と見直し」）において、介入後は有意に得点が高かった。これは、教員が直接心理職のコンサルテーションを受けたことで、情報共有及び問題解決がより促進され、生徒への支援に有効であったと認知されたことが要因であると考えられる。さらに、生徒指導部委員会参加者の、生徒及び保護者への接し方など、教育活動の評価と見直しについて改善がみられると認知されたとも考えられる。

2 今後の課題

今後の課題として、一つに生徒指導部委員会への継続的参加が挙げられる。本研究では生徒指導部委員会25回中10回のみ参加であった。毎回参加することで、さらに研究の妥当性が示されると考えられる。

二つに、生徒指導部委員会に参加していない教員への影響は、あくまで間接的影響であるという限界が挙げられる。直接的影響を測るような尺度の開発が課題であると考えられる。

三つに、A中学校だけの調査対象であったという点が挙げられる。さらに実践的研究校を増やして研究の信頼性、妥当性を評価する必要があると考える。

V 引用・参考文献

- Chrispeels,j.h.,Castillo,S. & Brown,J. 2000 School Leadership Teams:A Process Model of Team Development. School effectiveness and school improvement,11 (1) , 20-56.
- 石隈利紀・小野瀬雅人 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究 —子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査より 文部科学省研究補助金(基盤研究<c><2>) 研究報告書
- 大橋智樹・今野舞 2011 公立学校における学校臨床の現状と課題 宮城学院女子大学発達科学研究, (11), 33-42
- Poter,L.J. 2008 A case study implementation of response to intervention in an elementary school. Humanities and Social Science, 69,170-178.
- Richard,J.M. & Martin,R. 1979 Mental Health Consultation in the Schools. Jossy-Bass Publishers.
- Scott,R.S. 2000 School characteristics and educational outcomes: Toward an organizational model of student achievement in middle schools. Educational Administration quarterly,36,703-729.
- 山口豊一・家近早苗・樽木靖夫・石隈利紀 2010 中学校におけるチーム援助を促進する要因は何か —学校組織を中心として— 教育相談研究, 47, 33-41.
- 山口豊一・井上朋美 2013 学校コミュニティにおける心理職活用に関する基礎的研究 —尺度項目の検討を中心として— 教育実践学研究, 17, 1-10.
- 山口豊一・石隈利紀 2009 中学校におけるマネジメント委員会の意思決定プロセスと機能に関する研究 日本学校心理士年報, 1, 69-78.
- 山口豊一・石隈利紀 2010 中学校におけるマネジメント委員会に関する研究 —マネジメント委員会機能尺度(中学生版)の作成— 学校心理士年報, 2, 73-83.
- 山口豊一・伊藤花奈・下平幸枝 2012 学校コミュニティにおける心理職活用システムに関する基礎的研究 —修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによるカテゴリーの生成— 跡見学園女子大学文学部紀要, 47, 107-120.
- 山口豊一・水野治久・本田 真大 2012 学校コミュニティにおける心理職活用システムに関する基礎的研究 —学校を中心として— 日本教育心理学会総会発表論文集, (54), 589.
- 山口豊一・水野治久・石隈利紀 2004 中学校の悩み・深刻度と被援助志向性の関連 —学校心理学の視点を生かした実践のために— カウンセリング研究, 37, 241-249.
- 山口豊一・樽木靖夫・家近早苗・石隈利紀 2011 中学校におけるマネジメント委員会の機能がチーム援助体制及びチーム援助行動に与える影響 —主任層に視点をあてて— 日本学校心理士会年報, 4, 103-112,
- 山本健治 2011 学校心理臨床の展開に関する新たな試み 佛教大学大学院紀要, 39, 139-151.

表 1 生徒指導部委員会の出席者の概要

役職	性別	年齢	プロフィール
教頭	男性	50代	行政経験がある。
生徒指導主事	男性	40代	美術家教師。2年生徒指導担当。
1年生徒指導担当	女性	40代	家庭科教師。
2年生徒指導担当	男性	40代	生徒指導主事と同人物。
3年生徒指導担当	女性	40代	体育教師。
養護教諭	女性	40代	
心理職	男性	50代	第一著者。カウンセリングアドバイザー。

表 2 介入の概要

心理職参加回	会議の流れと介入の要素
第4回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。不登校児童生徒への援助について報告を聞く。突来した卒業生の問題行動に関しての報告を聞き、心理職からアセスメントをする。全体へのアセスメント・コメントをする。各学年の集会を見学し、各学年の雰囲気のアセスメントをする。
第6回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。校外学習の不要物持参生徒について報告を聞く。生徒の心配事に関しての親面談について報告を聞く。全体へのアセスメント・コメントをする。
第7回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。トイレ利用のマナーについて、報告を聞く。心理職から、見つけた際は早めに指導を行う等のコメントをする。全体へのアセスメント・コメントをする。
第9回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。廊下・階段・トイレの利用について報告を聞く。心理職から、共通理解が必要であると伝える。全体へのアセスメント・コメントをする。
第10回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。生徒の個別対応について、該当生徒の特性を考慮し、「行動の意味を説明する」ことが必要であると伝える全体へのアセスメント・コメントをする。
第13回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。いじめ対策委員会からの報告を聞く。心理職より、保護者との普段からの連携がひつようであると伝える。全体へのアセスメント・コメントをする。
第14回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。不登校児童生徒への援助について報告を聞く。突来した卒業生の問題行動に関しての報告を聞き、心理職からアセスメントをする。各学年の集会を見学し、各学年の雰囲気のアセスメントをする。
第17回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。適応指導教室に通う生徒の経過と報告を聞く。心理職より、長期的展望で見守る姿勢がひつようであることを伝える。全体へのアセスメント・コメントをする。
第23回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、心理職からケースへの質問とアセスメントをする。保健室登校の生徒について報告を聞く。心理職より、「相手の行動が気になる」という思春期の情緒不安を呈する現象であると伝える。現状身体化しているが、養護教諭やカウンセラーなどに話して言語化することがひとつ考えられると伝える。全体へのアセスメント・コメントをする。
第25回	1年・2年・3年の生徒の問題について報告を聞き、精神的に不安定で、スクールカウンセラーとの面接をしている生徒の支援に関して報告を聞く。心理職より、担任にこだわらず該当生徒へ「つながる人」を作ること、早めのチェックを行うことで予防することが必要であると伝える。心理職からケースへの質問とアセスメントをする。全体へのアセスメント・コメントをする。

表3 介入例

会議の流れと介入	
第4回	<p>生徒指導主事が司会進行。</p> <p>①1年・2年・3年担当より各学年の生徒の問題について報告。心理職より各ケースについて質問をし、アセスメントをする。</p> <p>例)生徒Bは、アスペルガー障害やLDが疑われ、またこだわりが強い傾向もある。しかし、小学校の頃に比べパニックを起こす頻度は下がっており、成長が見られる。生徒Cは運動が苦手かつおとなしい性格。続けられるか心配であるため担任等と話す。好きな種目ということで入部。予防的援助を心がけること、顧問との連携が必要である。</p> <p>②不登校生徒に対する援助状況の報告。</p> <p>③教頭より、突来した卒業生の問題行動への対応と指導について報告。心理職より、対応についてコメント。</p> <p>例)卒業生とは関係を「切る」必要がある。生徒を知る前担任などが関わることができればよい。対応にあたる教員へは、むげに帰すことは反発を招くことを伝える。</p> <p>④各学年の集会を見学する。心理職より、各学年の雰囲気のアセスメントする。</p> <p>例)D年生は小学校の頃から心配な点が見受けられた学年だが、上級生を手本として、指導を徹底する。E年生は落ち着いた生徒がいるが、学年主任の話を聞くことができた。</p>

表4 介入前・介入後の各下位尺度の平均値の差

	プレ			ポスト			t値
	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	
チーム援助体制尺度							
保健室相談室の活用体制	21	2.95	0.52	21	3.30	0.50	-2.83 **
チーム援助行動尺度							
援助チームへの積極的関与	21	2.54	0.50	21	2.99	0.42	-2.87 **
援助チームでの役割遂行	21	2.88	0.42	21	3.37	0.42	-4.10 **
マネジメント機能委員会尺度							
情報共有・問題解決	21	2.67	0.31	21	3.02	0.39	-3.28 **
教育活動の評価と見直し	21	2.31	0.30	21	2.68	0.42	-3.73 **
心理職活用尺度							
心理職への評価	21	2.69	0.39	21	3.07	0.45	-3.87 **
心理職の有用性	21	2.67	0.42	21	3.44	1.67	-2.14 *
心理職の活用体制	21	3.19	0.41	21	2.81	0.37	3.42 **

*: $p < .05$, **: $p < .01$

(有意な下位尺度のみ記載)

表5 生徒指導部委員会に参加した教員の介入前と介入後の比較

	F		G		H	
	プレ	ポスト	プレ	ポスト	プレ	ポスト
情報共有・問題解決	2.80	3.40	2.93	3.00	2.94	3.53
教育活動の評価と見直し	2.44	2.78	2.22	2.22	2.44	2.78
校長の意思の共有	3.00	3.00	2.22	2.22	3.20	3.20